オーディオ論壇収載

アナログと最新ディジタルの比較試聴から見えてきたこと(1)
－アナログはカセットデッキか？－

１．発端

K 氏と S 氏が来訪されて拙宅のシステムを試聴されていたときのことですが、突如、「アナログ再生は、(ディジタルがオープンリールなら)、まるでカセットデッキのようだ。」という過激な発言が飛びだしました。

どのような状況下かといいますと、アナログと、MQA や 11.2MHzDSD あるいは 5.6MHzDSD などの比較試聴をしていたときのことです。言わんとするところは、「アナログ再生は、何か窮屈でちぢこまったように、スケール感に乏しく伸びやかさが不足している。」というようなことだと思います。また、K 氏からはブラームスの P 協 2 番のバックハウスとベームのアナログ盤と MQA、リヒテルとラインスドルフのリマスターDSD 音源、ブロンフマンとラトルの BPODCH の比較試聴では、それぞれの演奏の曲の解釈がよく分かるということと、音の印象からバックハウスはベーゼンドルファー、リヒテルは NY スタンウェイ、ブロンフマンは現代のハンブルグスタンウェイではないかと推測されるということで、ディジタルでもピアノの音の再現、とりわけ左手の鍵盤の音が優れているというコメントもありました。

K 氏から言われるまでもなく、合唱の入った大編成のオーケストラや通奏低音に支えられた重層的なミサ曲などのバロック音楽やオルガン曲では、最新のディジタル音源に比べて、アナログは空間表現や重厚さが足りないという印象を持っていました。そしてこのことは、カートリッジのクロストークによる左右の音の混ざり合いやアームの低域の追随性に由来する、重低音の明瞭さに欠けるところに由来するものと考えていました。

２．指摘の意味するところの考察

２－１）アナログとディジタルの入れ物の違い

K 氏に指摘されて、改めて考え直してみますと、アナログは製作当時の再生システムの能力を考慮して、ダイナミックレンジを欲張らないよう、リミッターを通していますし、カートリッジやアームの追随性を考慮して、高域も低域もフィルターを通してカットしているはずです。

一方、ディジタルは、CD から SACD へ、さらには 5.6MHzDSD あるいは 11.2MHzDSD など、どんどんダイナミックレンジが上がってきています。高域の再生限界も、MP3 の 16KHz 内外は例外としても、CD の 20KHz からどんどん伸びてきていますので、リミッターやフィルターのかけ方も変わってきているはずです。

ユニバーサルミュージックの MQA はアナログマスターから SACD 用にリマスターし、さらに 352.8KHz24bit 相当に再度リマスターしてエンコードしていますので、少なくとも SACD レベルのダイナミックレンジと高域特性を持っているはずです。つまりディジタルは技術の進歩とともに、入れ物自体が大きくなっていますので、小さい入れ物に押し込める必要がなくなってきています。

しかしながら、K 氏もロストロポーヴィッチとカラヤンのドボルザークのチェロ協奏曲は MQA よりチェロの質感やオケの表現力などアナログの良さを感じ取られたとのことでした。おそらくは演奏から盤の製作に至る各ステージにカラヤンの「監修」の入ったと思われるアナログが MQA より好い印象で、後世のディジタルエンジニアによる 2 度のリマスターを経た MQA はそういった意図から外れてきているのではないかと推測されます。即ち、アナログ対 MQA という簡単な図式ではなく、最終のメディア提供に至るプロセスを考慮して判断すべきとの認識です。

２－２）再生システムの問題

一方、再生システム上の特徴を見直しますと、アナログではカートリッジは最新の高級機の My Sonic Signature Gold ですが、アームは 40 年以上の前のもので、追随性に問題がありそうです。また、ケーブルについては、ディジタルはすべてインフラノイズのリベラメンテシリーズを使用していますが、アナログ再生システムにはプレイヤー標準品のフォノケーブルが残っています。さらに、ディジタルはディジタルアキュライザーや USB アキュライザーをフル装備していますが、アナログ系にはそういったデバイスがありません。

以上から、アームとフォノケーブルの交換は視野に入れていましたが、K 氏から、このままではアナログがかわいそうだ、何か、手段を講じる必要がありそうだという発言がありました。

３．まとめ

アナログソフトについては、1980 年代のディジタル録音のアナログ盤に広帯域の片鱗を見せてくれる盤があることを経験していますので、できるだけ狭い入れ物に押し込めない、現代のアナログ盤がないかどうか、調べてみることにします。

今回、MQA の試聴を目的としてご来臨いただいたのですが、この過程でアナログと最新ディジタルの比較試聴から見えてきたことで、アナログの次なる課題が設定できたということが収穫になりました。

以上